

# 美 伝 統 の 手 技

第十三回

**万年筆に一身をつないで86年。三代目となる川窪克実さんだが、実質初代に等しい。技の伝承なく父が急逝し、跡を継いだのが26歳の時だった。**

手探りから始まった万年筆作り。職人を訪ねて技術を習得し、試行錯誤を繰り返す。努力はやがて世界の万年筆愛好家に知られる存在となる。志の高さがそれを可能にしたのだ。



左から煤竹使用のウォーターマン、海外の古切手を軸に装飾した「レトロスタンプ」、万年硝子筆（漆使用）。

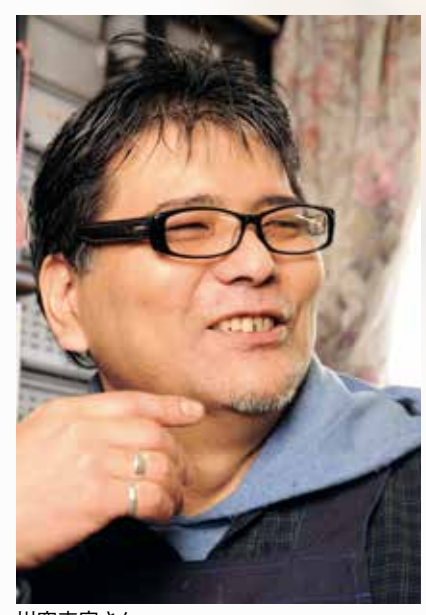
## 万年硝子筆について

以前に水晶硝子ペンという製品があったが、これは水晶を削った端材を粉にして、再度加熱。それを白い棒状にし、金属の型にはめ、型抜きをして作ったもの。このペン先も製造工程は基本的に同様だが、インクを付けて使うデスクペン・タイプの水晶硝子ペンに比べ、こちらは万年筆タイプなのでインクの補充も可能、外出先でも使用できる。また、スポイドでインクを入れて使うため、磨耗せず、比較的長持ちする。海外でも人気があり、ベネチアンガラスほか、一流のガラスメーカーは同様の商品を発売しているという。



かつてはペンの先だけを専門に作る職人さんもいたが、現在は国産メーカーや舶来のペン先を全体に削ったり、側面を少しえぐるなどしてカスタマイズし、使用している。

あちこちの職人を訪ねて  
技術を磨く



川窪克実さん

「今回の取材相手は、万年筆の職人さんに決まりました！」  
編集部から連絡を受け、ふと父親から中学校の入学祝いに買ったもらった万年筆のことを思い出した。  
「そういえば、あの万年筆どうしたっけなあ？」  
パーカータイプの細書き。材質はたしか黒いセルロイドで、首軸を外して、中にインクを吸入する通称「インク止め式」というシンプルなものだった。  
昭和30〜40年代、中学や高校の入学祝い（特に男子の場合）の定番が万年筆だった。ピンを開けたときに広がるインクのおいと、吸い上げる瞬間の不思議な感覚。そして、ペン先と紙が触れ合ったあとの、なんともいえない書き味は、「100円」ボールペンに慣れ親しんでしまった我々にふと懐かしさを感じさせてくれる。  
と、そんな郷愁を胸に向かったのが文京区千石にある「川

## 職人への道、26歳からの船出

窪万年筆店」。同店は昭和元年創業の老舗で、店主である万年筆職人の川窪克実さんは三代目だ。商店街を抜け、歩くこと10数分。HPに記された昔ながらの「長屋の2軒目」に川窪万年筆店はあった。  
ところが、店を訪ねると川窪さんは留守。店を預かるお母さんいわく「約束なんですよね？あれ、まだ工房で仕事しているのかなあ……」と。そこで目と鼻の先にある「川窪製作所」

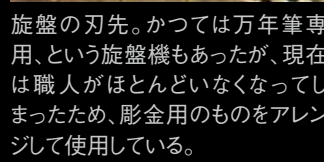
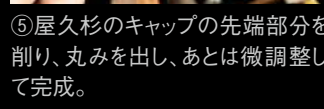
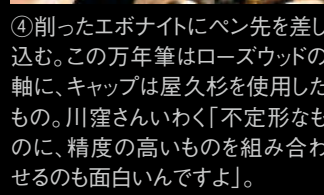
と記された工房を訪ねると、カーテンが閉じられた戸口の隙間から、「どうも」と顔を出したのが、一見、エンジニアを思わせるご主人の川窪さんだった。  
川窪さんは大学を卒業後、ソフトウエアの技術者をしていたが、26歳のとき、父の一夫さんが急性心筋梗塞で死去。母・久美さんも一時は店を閉める決意をしたというが、  
「子供の頃から工房の旋盤で遊んでいたし、高校時代はビンテー

ジに凝って、父の仕事を手伝いながら侃々諤々、なんてこともありましたしね。だから、自分のなかにも、『万年筆は文化』という思いがあつて、それが僕で途切れてしまうのは、やはり心苦しいなあ、と」  
結果、川窪さんは2か月後には会社に辞表を提出、職人の世界へ飛び込むことになった。  
◇  
とはいえ、師と仰ぐべく父は、すでにこの世にはいない。  
「工房に行けば工具はあるんだけど、最初はなにに使うのかわからなくてね……。ほんと、一事が万事そんな感じでした」  
そこで川窪さんは、仙台や鳥取にいる万年筆職人のもとを訪ね歩いた。  
「当時はまた職人さんが数人残っていた時代なんです。あとはモンブランとか舶来品を輸入していた商社に、工房にあった修理品を持ちこんで、これどこが悪いんでしよう。つてね（笑い）。技術者はそういう話好きですから、そこで得た知識も大きかったなあ」  
4年ほどは手探り状態が続いたが、その後、川窪さんに大き

なチャンスが訪れる。  
「通販雑誌の仕事をいただいたんですよ、たしか限定80本だったかな。で、初めてデザインを考えてエポナイトを削りだして……。その企画に絡んだのが、完成品を作るきっかけだったんです」  
95年にはHPを立ち上げ、オーダーのほか「修理や調整ができる万年筆店」をアピールしたところ、海外からも注文が入るようになった。  
「昔は、大きな百貨店の万年筆売り場に行けば、たいがいその場で職人さんが修理してくれたものだけど、今は万年筆売り場すらないような時代でしょ。だから、調整や修理の需要は想像以上でしたね」

実際、取材中にも修理に関する問い合わせの電話がひっきりなし。  
「時々、昭和初期の万年筆修理を頼まれることがあるんですけど、目の前でパツパツと分解して見せると、あの、以前、パイロットかどこかにお勤めだったんですか？」つて皆さん、ビックリされますよ」  
そういつて少年のような瞳を

# 手技の伝統



※1883年に世界で初めて毛細管現象を応用し万年筆を作ったのが、ルイス・エドソン・ウォーターマン。もともと米・ニューヨークで保険の外交員をしていたルイスは、大口契約でサインする際、ペンからインクがこぼれ契約を逃がした経験から、インク漏れのないメカニズムを開発。アメリカで興した会社をフランスに移し、現在はフランス最大級の筆記具ブランドとして確固たる地位を築いている。



①万年筆の軸になる素材(写真はローズウッド)を挟み、小型旋盤で中心に8ミリ程度の穴を開ける。材質にもよるが、特に木の場合は、一気に削れるものもあれば、ある程度時間をかけて徐々に削らなければならないものもあるという。



②中心に開けた穴を、刃を変えてさらに薄く削り、広げていく。この中抜き技術は、木工の専門家でもとこずるといわれる。



③穴が開いた軸にエポナイト(硬質ゴム)を差し込み、補強したのち、さらにエポナイトを削る。

## 川窪克実



Kawakubo katsumi

川窪万年筆店：東京都文京区千石2-31-7  
TEL：03-3941-0561  
<http://kawakubofp.web.fc2.com>



昭和30年代半ばの万年筆。左からセーラー、アルマイト、ベスト型。最も使いやすい万年筆の形状は「いちばん筋力負担が少ない」直径13ミリ。

さまざまな木の素材を使ったデスクペン。軸は左からわらび、孟宗竹、さるすべり、桜。拾ってきた小枝を燻煙処理してできた製品もあり、ペン先も付けペン用、万年筆用と多彩。

輝かせる川窪さんだが、もちろんそれは試行錯誤を繰り返すなかで身に付けた「手技」だった。

ただ、そんな川窪さんも、ここ数年の万年筆ニーズの移り変わりに驚きを隠せない。「以前はお客さんの多くが著述業、というイメージがあったんですが、ここ10年ほどは、ミュージシャンやデザイナー、クリエイターから吹き出される、そんな完璧な万年筆を作ってみたいなあ。それが夢ですかねえ」

時折、祖父や父が作った万年筆の修理を頼まれることがあるが、そのたびに先達の見事な仕事振りに接し、気持ちを引き締まるという。祖父の代から受け継いだ工具と、父の形見となった作業机が置かれた工房から生み出される珠玉の1本。デジタルが席卷する現代にこそ、自分にあつた「一生の友」を選び、自らの肉筆を残していくのも一興かもしれない。

## 最後の一滴まで ペン先からインクが吹き出される、 完璧な万年筆を作ってみよう

ただ、そんな川窪さんも、ここ数年の万年筆ニーズの移り変わりに驚きを隠せない。「以前はお客さんの多くが著述業、というイメージがあったんですが、ここ10年ほどは、ミュージシャンやデザイナー、クリエイターから吹き出される、そんな完璧な万年筆を作ってみたいなあ。それが夢ですかねえ」

時折、祖父や父が作った万年筆の修理を頼まれることがあるが、そのたびに先達の見事な仕事振りに接し、気持ちを引き締まるという。祖父の代から受け継いだ工具と、父の形見となった作業机が置かれた工房から生み出される珠玉の1本。デジタルが席卷する現代にこそ、自分にあつた「一生の友」を選び、自らの肉筆を残していくのも一興かもしれない。



製作作業中の川窪さん。

ターといった職業の方が圧倒的で文筆関係の方はめっきり少なくなりました。作家さんのなかにはアイデアだけ万年筆で書く、という人もいますようですが、それもごくごく稀。パソコン入稿に変わったことで、もはや手書きというスタイルが入り込む余地はなくなってしまうということでしょうね」

かつて宇野千代や柳田國男をはじめ、多くの作家たちから愛されてきた同店の万年筆も、時代とともに実用的な筆記用具としてではなく、趣味的な意味合いが強くなってきた。

「でも万年筆が好きなのは、装飾性だけじゃなく、やはり実用性を重視しますからね。太さやインクの色は、いわばその人の個性だし、筆跡はまさにその人自身の足跡ですから」

筆圧をかけて紙にインクをこすり付けるボールペンと違い、万年筆は、ペン先からあふれ出るインクをそのまま紙に流していくため、脳をリラックスさせる効果があるといわれる。

だからこそ――。

「インクの出具合が常に一定で、最後の一滴まで無駄なくペン先